

『「とんび物語」をつくって歌い方を工夫しよう』（第4学年）

(1) 「思考力」育成に向かう思考活動の構造 ～メタ認知からのアプローチ～

本単元で育成したい「思考力」

楽曲から描いたイメージに合うように強弱の変化を工夫する力

【メタ認知的知識（思考様式）について】

登場人物の気持ちの変化に着目する

単元でねらう「思考力」育成のためには、上記思考様式が必要である。なぜならば、音楽表現において、気持ちは強弱と密接にかかわっているからである。例えば、「さみしい気持ちだから小さい声だろう」「この人物は怒っているから大きな声だろう」のように考えることができる。

もちろん、「怒りを押し殺してしゃべる」のように、怒っているけども音量は小さいこともある。状況に依存することは多々あり、一律には答えを導き出せるものではないが、そういったことも含めて強弱の変化を工夫するための着眼点として本思考様式は有効性をもっていると言える。

【期待するメタ認知的活動の様相】

モニタリング

気持ちの変化を手がかりにして、楽曲から描いたイメージにふさわしい強弱の変化を工夫している。

コントロール

当初自分が考えていた工夫と、交流を通して友達からもらったアドバイスとを比べて、気持ちの変化にふさわしい工夫の仕方を選択している。

(2) 思考活動を促す開発教材

反復表現からイメージをふくらませる学習

○ 思考様式を長期記憶化する側面から

従来、歌唱の活動において強弱の変化を工夫しようとする際、子どもたちは楽曲の雰囲気全体的に捉えてしまい、表現の変化を工夫しようとする意識をもつことが難しかった。例えば、「この曲は楽しそうな曲だから、大きな声で歌おう。」というようにである。また、「この部分が一番わくわくするから強くしよう。」と、大きなまとまりレベルでの強弱の変化を考えようとし、もっと細かい部分に目をつけて表現を工夫しようとする意識も弱かった。そのため、「登場人物の気持ちの変化に着目する」という思考様式を十分に生かす場がもてず、思考様式の有用性が実感されなかったのである。結果、思考様式は長期把持されなかった。

そこで本単元では、「反復表現からイメージをふくらませる学習」を行う。まず、本教材「とんび」で4回繰り返される「ピンヨロー」という鳴き声を基に情景を想像し、とんび物語（4コマまんが）に描く。その後、自分の「とんび物語」に合ったとんぴの気持ちの変化を考え、自分なりの表現の工夫を表出する。さらに、その工夫について、友達と交流し、他にどんな表現ができるか、根拠を出しながら話し合う。このように気持ちの変化を表現の工夫につなぐ思考の場を繰り返し設定し、多様な工夫が生まれる有用性を実感させることで「登場人物の気持ちの変化に着目する」という思考様式の長期把持を図る（繰り返し）。

○ 経験と結ぶための支援

「とんび」の情景から強弱の変化を考えるのに先立ち、国語科で既習の詩「ふしぎ」（金子みすず）の音読表現の工夫を想起するようにする。ここでは、最後の連の「わたしはふしぎでたまらない」における作者の不思議に思う気持ちが強く、それゆえ、そこを他より強く読むという学習を経験している。それを基に、「とんび」で4回繰り返される「ピンヨロー」においても、とんぴの気持ちの変化に着目すれば表現の工夫につなげられることに気付くようにする。こうすることで、「対象となる情報を既習に位置付ける」ようにする。

(3) 単元内で思考様式を習得・活用する過程 (総時数 3時間)

主な学習活動	ねらう思考様式を習得・活用する過程
<p>● 第一次 (2時間)</p> <p>「とんび」の情景を想像する</p> <p>歌詞のイメージをふくらませ「ピンヨロー」と鳴くとんびの様子を4コマまんがに表す。</p>	
<p>● 第二次 (1時間: 本時)</p> <p>「とんび」の歌い方を工夫する</p> <p>「とんび」において4回繰り返し返される表現(「ピンヨロー」)に着目し、4コマまんがに表したイメージを基に、その部分の強弱の変化を工夫する。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p style="text-align: center;">思考様式を習得する段階</p> <p>4コマまんがにとんびの様子を描いたり、とんびの言葉を吹き出しに書いたりすることで、とんびの気持ちに着目できるようにし、それを表現の工夫につなぐことで思考様式の習得を図る。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">思考様式を習得・活用する段階</p> <p>強弱の変化を○の大きさの変化で表すことで表現の細かな違いを明確にし、交流を活性化する。さらに「登場人物の気持ちの変化」を表現の工夫の根拠として説明することで、思考様式の活用を繰り返し、習得を促す。</p> </div>

(4) メタ認知的活動を取り入れた学習指導の実際

① 子どもの様相を通して ～質的な見取りから～

子どもたちは、自分の作った4コマまんがの1コマ1コマについてとんびの気持ちを想像し、その強弱の変化を○の大きさの変化で表した。それは、次のような意図による。

モニタリングへの支援：モニター対象の明確化

声の大きさの変化を○の大きさの変化で表すことにより、自分の強弱の工夫を細かく表出できるようにする。

この支援により、ただ単に「強→弱→強→弱」のように表したのでは伝わらない微妙な表現の変化に着目できていたようである。また、友達との交流においても、細かな変化に着目してカードにアドバイスを書いていた。例えば次のようなものである。

- ・1コマ目はもう少し小さくてもいい。ひとり言は「ぼそっ」と言うから。
- ・(1コマ目も大きい○にしているが)1コマ目より3コマ目の怒っている方を強く言ってみては?



【強弱の変化を○の大小で】

授業の中では、互いに歌って聴き合う場も設定したが、歌唱表現が十分でない子や恥ずかしがる子も見受けられた。そのような時、○による表出は、聴き手が表現の工夫を判断する際の「モニター対象の明確化」にもつながっていた。

この支援を通し、友達との交流が活性化された。そして次に、以下のような支援を行い、自分の思考を見つめ直すきっかけをつくろうと試みた。

コントロールへの支援：修正箇所の特定

「その『とんびの気持ち』なら、こんな歌い方もできる」というアドバイスを友達からもらい、自分の表現の工夫と比較することで、再考すべき箇所を明確にする。

子どもたちは、友達からもらった何枚かのカードを読み、自分の表現の工夫の、どこを見直せばよいかを考え始めた。

その思考において、本時長期把持をねらった、次の思考様式が繰り返された。



【友達からもらったアドバイス】

登場人物の気持ちの変化に着目する

<多様な考えを吟味しようと思思考様式を繰り返す：「繰り返し」に働きかける支援>

アドバイスカードには、「○コマ目を～したらいい。～だから。」と書くようにした。それをもらった子どもの一人は、次のような反応を示した。

【抽出児 A（高メタ認知能力）】

(B 児からは「3コマ目を強くしたらいい」、C 児からは「4コマ目を強くしたらいい」というアドバイスを受けた。)

「これでは、全部の『ピンヨロー』が大きくなってしまおう。」

「3コマ目は、確かに気持ちが楽しくなっているから強くしよう。でも、4コマ目は『もう遊べない』としょんぼりしているんだから、やはり小さい声がいい。」

他の子どもたちも、アドバイスカードをもらう度に、自分が当初考えていた表現と比べながら、「○○さんの言う通り、この気持ちだったらこう歌った方がいい。」「こんなアドバイスをもらったけど、やはり自分の歌い方が、とんびの気持ちにぴったりだな。」というように、思考様式を繰り返し用いながら「ピンヨロー」の歌い方を確定していった。

このように、アドバイスカードに修正箇所を明示し、複数の友達と交流することで、自分の考え直してみたい部分が明確になったと言える。低メタ認知能力の子どもにおいても、いくつかの友達のアドバイスから、自分に必要な考えを取り入れて修正箇所を特定し、表現を工夫していくといった様相が見られた。

② 検証データを通して ～量的な見取りから～

本実践の前後でテスト（4点満点）を用いて「思考力」の伸びを検証したところ、平均値で0.6点向上した。この差についてt検定を行ったところ、有意差が見られた〔 $t(35)=2.30, P<.05$ 〕。しかし、思考様式に関して実践直後と1か月後の状態を調べたところ、それぞれの結果に有意差が見られた〔 $t(17)=2.72, P<.05$ 〕。すなわち、本教材を通して「思考力」の伸びは見られたものの、思考様式の長期把持における効果は薄かったと言える。

③ 考察

この実践を通し、子どもたちは音楽の一部分からも表現の工夫が多様にできるということに気付いていった。それは、4コマまんがの1コマ1コマに「ピンヨロー」を当てはめて、それぞれの気持ちを詳細に捉えていったことが有効であったと思われる。量的な見取りにおいて「思考力」の伸びが見られたのは「登場人物の気持ちの変化に着目する」という思考様式の有用性を実感できたからではないだろうか。

しかし、質的な見取りを通して「友達からのアドバイスカードを1枚しかもらえなかった子どもは、繰り返し思考を吟味する機会も少なくなっていたのではないか。」という課題が明らかになった。4コマまんがの内容によりペアを意図的に指定し、活発な交流が促されるようにすること、カードだけでなく歌唱表現を通しての交流の場も確保することなど、思考様式を「繰り返し」ことの重要性を、思考様式把持テストによる量的検証データが示していると言える。